

川尻 耕治さん
1991年4月～1993年6月/モルディブ共和国/野菜

モルディブから立山山麓へ

川尻さんが青年海外協力隊としてモルディブ共和国で活動したのは20年近く前のことになる。モルディブはスリランカの隣、1,200ほどの島から成り立つ国だ。その中の1つ、ムラク島という小さな島で川尻さんは野菜作りや調理法を教えた。常農の習慣のない島での活動は苦勞もしたが実に良い経験になったと川尻さんは語る。

活動中に農業で生きていくことを決めた川尻さんは帰国後、立山山麓あわすのスキー場で「ロッジわがや」の経営を始め、今に至る。登山ガイドの資格も持ち、立山・薬師岳・剣岳をはじめ、全国の山を案内している。

宮城県石巻市でのボランティア活動

2011年3月11日、東日本大震災が日本を襲った。テレビからは目を覆いたくなるような映像や速報が絶えず流れた。川尻さんははいてもたってもいられなくなり、宮城県石巻市でのボランティア活動を決意した。

現地では支援物資の配布や炊き出しなど様々な活動に従事。9日間の活動後、一旦富山に帰ったがまだまだ足りないと感じ、再び石巻市へ。水浸しになった広場や学校の泥だしや300人分の炊き出しなど、他のボランティアと力を合わせて活動した。

被災者たちは強く明るかったという。「被災地では強さ、温かさ、優しさ、いろんな気持ちを、うわべだけではなく心の底から感じる事ができた」と語る。モルディブでも小さな共同体の中、皆で協力しあう姿に「日本とは違う豊かさを感じた」そうだ。助けられているのかもしれない。

ロッジわがや
<http://wagaya.web.infoseek.co.jp/index.html>

※石巻市では、青年海外協力隊OBチームにも出会った。被災者側の立場に立った活動に感動したという。また、炊き出しには半澤さん(前号NEXT STAGE掲載)から支援された大量の野菜も使われた。



お知らせ ▶▶▶ JICA国際協力中学生・高校生 エッセイコンテスト

2011年
募集テーマ

「これからの日本 ～世界の中で私たちができること～」

友だちとの会話や学校の授業、本や新聞、テレビやラジオを通して感じたこと、ボランティア活動を通じて考えた国際協力のことなど、自由な題材であなたの想いを伝えてください。
最優秀賞・優秀賞・審査員特別賞の受賞者には、副賞として海外研修旅行が贈られます。

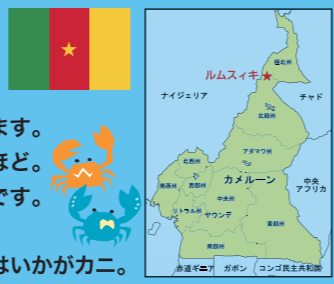
募集期間
2011年
6月16日(木)
9月16日(金)



知られざる!?

世界のパワースポット ～カメルーン編～

「アフリカのミニチュア」と呼ばれるカメルーン。アフリカらしさが凝縮されています。中でも「ルムスイキの奇岩群」は文豪アンドレ・ジイドが「世界一の奇観」と記すほど。奇妙な形の岩山が屹立する光景に、異次元にいるかのような錯覚を覚えるそうです。もちろん、自然崇拜・信仰の対象にもなっています。また、ルムスイキの村は蟹占いも名物だそうです。みなさんも占ってもらってみたいかがカニ。



発行元: **JICA 北陸** (独立行政法人 国際協力機構)

〒920-0853 石川県金沢市本町1-5-2 リファール(オフィス棟)4階

TEL:076-233-5931 FAX:076-233-5959

E-mail: jicahric@jica.go.jp

JICA北陸ホームページ <http://www.jica.go.jp/hokuriku/index.html>



みんなで止めよう温暖化
チーム・マイナス6%



世界の広場



特集 東日本大震災 ～JICAの取り組み～

3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震(東日本大震災)。世界最大級の地震・津波災害に対し、JICAは理事長の「できることは何でもやりなさい」の言葉のもと、さまざまな支援活動に取り組んでいます。引き続き、できる限りの支援を行ってまいります。

① 被災者支援のボランティア活動

一時帰国中の青年海外協力隊員やJICA職員、そして協力隊OB/OG約140名が宮城県や岩手県を中心に、各自の技術を活かしたボランティア活動を展開しています。

② 被災・避難者のJICA施設での受入や物資の提供

震災直後から福島県の要請により協力隊二本松訓練所を被災者・避難者に開放しています。4月26日の時点で、約200名の住民が避難しており、ここでもJICA職員(延べ20名)や看護師や幼児教育協力隊員(延べ9名)がボランティア活動を行ってきました。その他、人工透析が必要な福島県の患者100名の東京国際センターでの受入れ、JICA国内機関から自治体経由での物資の提供も行いました。

③ NGO・国際機関の活動支援

国連災害評価調整チームや国連人道問題調整事務所の活動支援や、日本国内のNGO団体の活動拠点としてJICA施設を提供しています。

④ 義援金取りまとめ

JICAで働くスタッフ、専門家、ボランティア等有志による義援金(合計4,800万円強)を寄付しました。

⑤ 途上国100カ国からの励ましメッセージの取次ぎ

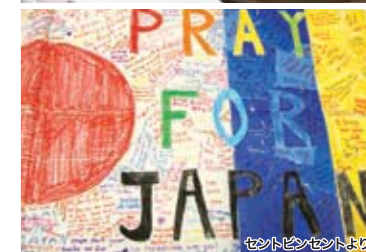
アジア、アフリカ、中南米、中東、欧州、大洋州から3,000件を越すメッセージを受取りました。これらのメッセージを避難場所・ボランティア活動拠点として提供しているJICA施設へ掲示しました。詳しくはJICAホームページをご覧ください(<http://www.jica.go.jp/index.html>)。

⑥ 研究及び国際発信への協力

東北大学(災害制御研究センター)等による津波防災の専門家・研究者に協力しています。国連水と衛生諮問委員会等との共催で、「水と災害に関する東京会議」を4月28日に開催し、その成果を国際的に発信しました。



一時帰国隊員の様子 撮影者 久野真一



セトビセトより

「頑張れ、日本」世界から激励



ホンジュラスではJICA事務所の現地スタッフやその家族が先頭にたち、街頭募金が行われました。メディアなどでも取り上げられ、一般の方からも多く義援金が寄せられました。



ボリビアのエル・タロベ村における淡水魚養殖場(技術協力プロジェクトによる施設)の開所式の際、村人たちが横断幕を掲げて迎えてくれました。横断幕の意味は次のとおり。「頑張れ、日本」「災害の痛みを私たちも感じています」「いつも私たちのことを覚えていてください」



インドで実施された「シッキム州生物多様性保全・森林管理事業」(有償資金協力事業)の実施機関であるシッキム州森林環境野生生物保護局により哀悼式が開催されました。1000個のバターランプが灯火され、多くの人々が静かに祈りを捧げました。

「経験」活かして



ニジェールから一時帰国した青年海外協力隊員が東松島市矢本第一中学校でボランティア活動を行いました。写真は市役所から届いた支援物資を仕分けしているところ。隊員のいる場は子どもたちの憩いの場になりました。



石巻市では、元電気隊員の館山さんをはじめ複数のスタッフが協力し、石巻港小学校への通電に尽力しました。被災地に1ヶ月ぶりの明るい夜が訪れ、電気が灯ると同時に避難住民から歓声が上がりました。



同じく石巻市では木工隊員が廃材を利用してテーブルセットを製作しました。技術を活かし、廃材を再利用することで「思い出も捨てずにすむ」と話します。そのほか、女性のための更衣室なども製作・設置しました。

撮影者 久野真一